

ミオヤの光

淨土の卷

佛身及び佛土

如來の讚頌

151413121110987654321
 佛身土の觀念の三階級
 小乘教 法相
 天台 嚴
 華嚴 嚴
 眞言 派
 本願寺派
 如來の身土
 眞佛土の異名
 淨土とは感覺的
 極樂とは感情的
 理智に約して寂光土
 意志的に涅槃世界
 神秘的に密嚴世界
 譬喩的に蓮華藏世界

87654321
 法藏菩薩發願の偈
 四誓の偈
 靈鷲の月
 靈山淨土
 釋尊の本懷
 聖意の現はれ
 佛々相念の讚
 佛智の靈園

無對光

佛陀及び佛土

佛身土の觀念の三階級

初め天然教。二超然教。三圓具教。

天然教は幼稚なる宗教意識即ち原始的宗教思想。即天然の人には神の觀念未だ幼稚にして神を天然現象の中に求め天然物素と一なりとし深奥の理想なく宇宙現象の中に自然的意思想あるが如くも未だ明瞭ならず。

自然科学唯物論者の如く盲目的器械的世界觀は劣等なる意識と云はざる可からず。天然的人は現在の苦惱を免れんが爲に神に對する願望は有形感覺を超ゆるなく、神も有形世界に。解脱また然り、神の觀念に於ても劣等なり。

次に超然教には宇宙現象界は幻夢の如くにして眞實なるものに非ず。相對規定なる

一

世界及び人生は身心土は彼岸と斷絶して、遠き彼岸に眞實の涅槃界在り。現在の感覺界を超絶せる彼岸とす。甲は空間的に高妙なる天にあり、また十萬億土に超たりとす

乙は時間的に三祇の後に始めて靈界現前すと。或は百劫或は死後に始めて到るとの超然主義は現象界と靈界とは全く宇宙の體を異にするものとす。

進みたる圓滿の宗教は宇宙本來如來の眞身土にして絶對無限の如來の眞土を離れて世界一物も有るなし。不可思議にして如來の體内に在れども、衆生は自ら迷ひて本を背にし末に向つて眞相を知る事なし。如來は無始已來無始無終に、遍空間遍時間、不可思議の靈態にして消極としては絶對無限、言語道斷、十佛自境界、不可思議と表徳としては深祕的に盡十方無碍光如來、圓融無碍の靈性より重々無盡眞徳の故に十方面に無盡の靈象を現じ無盡の靈能を以て一切を度す。宇宙は感覺より見れば物質的自明の世界體なるも、觀念的に自觀せば如來の境界至眞至善至美の眞理の靈界にして如來不可思議の自然界なり。

天然教には感覺界已上を未だ意識せず。超然教には現象界と靈界とを其體別々なるものとす。發達せる宗教には絶對の實體が自觀の眞相と現象假相との異見にして其本體の別なるに非ず。本來の眞面目と生理機械的現象所見との異相なり。

圓教が靈界の方面即ち如來の身土を詞を以て表するに種々の名あり、感覺的には清淨土と云ふ。

小乘教

今此身心及び身、受、心、法、共に不淨、苦、無常、無我なり。之を厭捨し身心の煩惱を斷じ無我の觀智を以て貪瞋等を斷じ諸の業を止息し我空眞如を證得し乃至羅漢果を得て灰身滅智方に諸苦を滅す。之を涅槃と稱す。此五蘊の泡露を厭ひて偏眞無爲に歸す之を最終の歸處とす。斯教は個人解脱の消極の方のみに滞つて未だ夫れ已上の理を識らず。

法相

法相家に依らば宇宙の現象界は是自己第八阿賴耶識の所現なり。識所變より自己の五根となり感覺より六塵の世界顯はれ國土及び宇宙が現象せしなり。皆自己の識が所

三

現なれば識の外に其實法あるに非ず。實に在らざる幻物を實有の我及び萬物を執するは喩へば熱を患ふ人の夢に異色の人を見るが如くは患力の故に感ずるものにて實に人ありと謂ひし我身も唯識の變現する處なりと。宇宙現象界は幻夢にして實に非ず。若し人五位の修業に進趣窮盡して煩惱と所智の二障を斷滅盡せんが爲に三祇百劫萬行を修して最後の一念に佛果を得る時八識が轉じて四智と成り二轉妙果三身圓滿に寂々照々として朗かなり。

清淨法界は是自性身(體)四智の相は是如來自受用する相、平等性智所現の身は陀受用身成所作智所現の身は變化身たり、妙觀察智は是說法斷疑の智なり。

四智と不生不滅清淨法界の體とを合して如來五淨三身の相とす。涅槃に本來自性清淨涅槃と無住處涅槃とあり。無住處涅槃とは大悲智慧常に輔翼此に由て生死涅槃に住せず有情を利益し未來際を窮め用にして常に寂故に涅槃と名づく。此教は感覺界は八識所變にして假象なり八識轉する時は四智二轉依菩提涅槃を現顯す。修によつて現するも佛界本來の理を説かず、また超然主義にして三祇の時間を超え、感覺は妄にして樂は眞實、其體を異にすと。

天台

天台には四土を立て凡聖同居土、方便化土、眞實報土、常寂光土、前三土は機感相應して感ずる處、常寂光土のみ唯佛の安住する淨土是れ機を離れ唯佛の自境、即ち是四德波羅密を以て莊嚴し周遍一寂にして常に照す理智冥合是法身の住處なり。

永恆常然本自寂靜照々玲然の淨土には自然の妙樂あり、自在無碍にして清淨なる處、唯佛境界、眞理と一切慧と一切能との徳のみあつて充滿す之を常寂光土を名づく。

寂光土は寂に即して能く照す照にして寂、身に即して心なり、心に即して土、身心土不二にして二、二にして不二、是の如きの甚深境は言語に超え心行所滅相待を絶したる絶對眞如なれば常識を以て測るべからずとは遮情の分にしてまた感覺的に表明すること能はざればなり。法華經に如來自己の知見する神祕の内面を洩して法華經には是の如くに説玉ひたり。我三界の如くに三界を見ずまた我如實に三界の相を知見すと。然らば常寂光淨土は眞空寂寥なるか。曰く然らず。如來自受用の妙境は無明覆え

る衆生の爲には神祕的なるも如來にはは無明の夜明けて白日青天宇宙の眞象を見る。我淨土は毀たす衆生劫盡きて大火に焚かるゝ時も我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり。園林諸堂閣種々寶莊嚴。又如來慧光照すこと無量なり。壽命無數劫柔和質直なる者は常に我身此に至て説法するを見る、本來佛壽長遠久遠實成の本佛は常に寂光土に在て摩訶毘盧遮那如來と號す。

三界の如くにとは天然感覺界を云ふ。如來の方面は眞實の靈界にして即ち觀念界なり。宇宙實體の内面に清淨國土ありて光明赫耀輝燦爛にして言ふべからず。如實に觀修して佛智に相應する時即ち觀することを得べし。

隋の智者大師法華三昧に入て靈山一會未散なるを感ず。本來絶對靈界何の處に於てか觀せざるべけん。單に衆生無明に翳せられて自ら見ざるのみ。

衆生は三昧の心密を開きて如來の靈界を觀す。終局に歸入する時は即ち常寂光土の毘盧遮那に歸入す。

寂光の如來は鏡智を藏して而も常寂照々法身を體とし應化の身を發現して未來際を盡して衆生を度せん。應身は感覺界に示現す。三世十方諸佛是なり。三世十方諸佛も内而を觀すれば即ち一體本佛なり。

華嚴

華嚴によらば諸法無自性また因分は普賢の境界なれば、重々無盡の理を盡して談じ得べきも果分は如來十佛の自境界なれば甚深玄妙にして説べきにあらず。感覺界の相對的情識に墮せんことを畏れて無明に翳せらるゝ時は如來の眞境も凡夫の境に俗化すべきこと喩へば赤鏡を以て見る時は物として赤色を呈せざるは無きが如しと。如來自境界は甚深々々華嚴三昧の眼を以て暫らく如來の眞境界をのぞき見んか、宇宙森羅萬象悉皆毘盧の果徳浩々たり。衆相俱に是佛の妙象なり、宇宙を盡して皆蓮華藏世界一切の塵々として相互に重々無盡に蓮華藏世界を映現す。本來是如來圓融無碍の靈徳の顯現たる塵々なればなり。天然の感覺は明を失ひ闇に迷ひを脊にして塵に向ふ。眞理を知らず。實に法界緣起宇宙萬象は唯是一大心靈の開發なり。萬物一として關聯せざるものなし。相對する萬有は互に相關するものにして萬有の多々單獨孤立たるに

非ず。悉く内面不可割に關聯するなれば萬物同體にして表面に差別の相を呈す。差別即ち平等なれば事々無碍論起る。

宇宙は凡夫の感覺には生滅變易無量差別の相をなすも、如來は蓮華藏世界に盧遮那如來ましまして華藏界一々の塵々相互に映徹して無碍なるを見る。

佛に十身あり。衆生身、國土身、業報身、聲聞身、緣覺身、菩薩身、佛身、智身、法身、虚空身、等一切諸法として佛法に非ざるなし。宇宙萬物として佛體ならざるなし萬德莊嚴にして包攝無窮なり。一心靈が差別の萬物なれば相互に主となり伴となり一法を主とせば餘は舉て伴と爲る、爰に於て主伴圓融論となる。是果海圓融の相一多無碍、九世を攝して一念に入る、如來正覺を成する時一切衆生悉く成佛す。念却融即圓融無碍の佛眼より觀すれば情非情として佛ならざるはなし。是如來自證の方面を表はしたる相なり。

眞言

眞言家は秘密教即ち神秘的に如來の内證を本とし感覺の現象を末とし現象界の教理は顯教の分齊にして如來自證の内面を説明するは獨り密教のみ。凡夫は無明により本を捨て末に轉じ本來毘盧遮那如來の中に在り乍ら自己の無明に秘せられて如來の眞境界を見ることが能はず如來之を秘するに非ず衆生自ら煩惱に陰覆せらるゝのみ。秘藏寶輪に、爾時毘盧遮那世尊入於一切如來一體速疾力三昧說自證法界體性三昧言我覺本不生出過語言道諸過得解脫遠離於因緣知空等虚空如實相智生已離一切暗第一實無垢意は天然の相對の規定を超て所謂の絕對本覺即ち父母未生前の本覺の自體本爾の教目性の理が顯現したる處、言語にも超てすべての凡夫の迷及び一切の罪惡が脱却して相待の相互の規定因果律を離れて自性天眞の虚高く萬象の眞面目發露し絕對無碍の第一義天に常住不變の大日輪は永く自存の光明を耀々として照すも感覺には凡夫の眼には翳せられて知見すること能はず、天然の意識を超て心眼開發して清淨無垢となりて眞相を顯はる。然らば如來の深秘の内面はいかにてあらん。

宇宙の眞相なる大日輪を觀せんと欲せば須らく自己の心窓を開くべし。靈窓開ける所に永恒の大日輪が光を發つて其富饒なる玄妙なる世界を見せしむべし。

寶輪に曰眞言行者いかに修してか無上菩提を證するぞ。當知法爾に普賢大菩提心に住すべし。一切衆生は本有の薩埵なれども貪瞋痴の煩惱に縛せらるゝ故に諸佛の大悲垂巧智を以て此甚深の秘密諡伽を説いて修行者をして内心の中に日月輪を觀せしむ。此觀を作が故に本心を照覺するに湛然清淨なること猶滿月の光が虚空に遍して分別する所無きが如し。亦無覺と名づけ亦淨法界と名づく、亦實相繫若波羅密海と名け能く種々無量の珍寶三摩地を含むこと猶滿月の潔白分明なるが如し。何とならば一切有情は悉く普賢の心を含めり。我自心を見るに形月輪の如し。何故に月輪を以て喩となすかとならば、云爲く滿月圓明體は即ち菩提心と相類せり。凡そ月輪に一十六分あり。諡伽の中の金剛薩埵より金剛拳に至るまで十六大菩薩者あるに喩ふ。三十七尊の中に於て五方の佛位に各一智を表はす。東方阿閼佛大圓鏡智を成するに由て亦金剛智と名く。南方寶生佛平等性智を成するに由つて亦灌頂智と名づく。西方の阿彌陀佛妙觀察智を成するに由て亦蓮華智と名け亦轉法輪智と名づく。北方不空成就佛成所作智を成するに由て亦羯磨智と名づく。中央の毘盧遮那佛は法界智を成するに由て本と爲す。已上の四佛より四波羅密菩薩を出生す。四菩薩とは即ち金寶法華なり。三世一切の聖賢生成養育の母なり。是に於て印成せる法界體性の中より四佛を流出す。四方如來に各四菩薩を攝し十六菩薩と爲す。三十七尊の中に於て五佛四波羅及以後の四攝八供養を除いて但十六大菩薩の四方の佛の所攝のみを取る。

眞言

大日如來心王の覺體塵數諸華は心數の眷屬、五智所成の依正二報は本有金剛界體性智自在大三摩耶 妙觀察智大は大曼陀。三摩耶曼陀より覺。現諸法本初不生。平等性智。大菩提心大圓鏡智。不壞金剛。諸尊常住身も嘆す光明心の覺體を嘆す。殿は所作

三十七尊九會曼荼十三大會四重曼荼重々常網摩利聖衆依正無盡自在圓滿

密嚴華藏塵數諸尊森羅而住一切衆生萬德妙用歷然として具故に一切衆生皆毘盧遮那なり一切諸法悉是覺王境界

六大を佛體と爲四曼を相をす三密を用とす六大の前五大は理第六は智之を金胎とす。六大即大日如來一切諸法六大を離れず、六大法性性周遍諸法故一切諸法として大日に

非ること無く大日法界に周徧す

理智共に大日、理、胎藏、四重聖衆、智金剛界、三十七尊兩部不二爲理智冥合。

森然諸法相宛爾たる諸法皆是真如即大日

表徳門には十心諸法平等にしては大日の表徳故一塵も不棄皆是虚舎那

一切諸法は大日真如即我身佛法即吾體

本願寺派

本願寺派には佛に二種法身あり。一に法性法身二に方便法身となり。阿彌陀佛法性法身としては自性本然にして周徧法界の實體にして本來是佛何ぞ修證を藉らん。是また久遠實成の如來十方三世諸佛の本佛。

方便法身とは法性に背き顛倒し無始已來生死に流轉し自ら出離すること能ざる衆生の爲に法爾の本佛が方便法身を發現し物をして開明の光を與へんが爲に五劫思惟永劫法藏の跡を垂れ六八の弘願を建て願は悉く衆生の爲にす苦難徧に衆生をして心門を開きて如來の室に入らしめんが爲に本願成就し因圓果滿十劫正覺を無碍光如來と號す。

此衆生の爲に法性法身より方便法身を發現したる十劫始成、本佛と冥合して一體不二なり。暫く衆生を攝取の爲に慈悲の手を垂れて方便法身を現したるも正覺の心開きて見れば本佛と別なるに非ず之を盡十方無碍光如來と號したてまつる。

眞佛土とは佛とは即ち是不可思議光如來なり。土は亦是無量光明土なり。大悲の誓願に酬報するが故に眞の報佛土と曰ふ。願とは光明と壽命との願なり。如來の光明は徧く法界を照して餘すことなく壽命は永恒にして究盡あることなくして常恒不斷に十方衆生を攝取す衆生の方よりは自己の世界を感ずるも如來は光明の照す處壽命の存する處として眞佛土に非ざる處なし。

又涅槃經に言く又解脱とは名けて虚無と曰ふ。虚無は即ち解脱なり。解脱は即是如來なり。如來は即ちは無虚なり。作所作に非ず乃至眞解脱とは不生不滅なり。是故に解脱は即是如來不生不滅不壊にして有爲の法に非ず。是義を以ての故に名けて如來入大涅槃と曰ふ。又解脱とは無上々と名づく無上々とは即眞解脱なり、解脱

とは即是如來なり。若し無上菩提を成するを得ば無愛無疑、無愛無疑即眞解脱なり。

衆生の機に對する時は十劫正覺の如來四方極樂世界に在まして我等を照徹したまふ

如來の方より見れば 永恒自存の眞佛如來即ち盡十方無碍光如來三界に勝過せる究竟して虚空の如く廣大にして邊際なき處に在ませり。

衆生に應じて、報とは如來の願海に由て果成の土を酬報せり故に報と云ふ。然るに

願に眞と假と有り是を以て復佛土に眞あり假あり選擇本願の正因に由て眞佛土を成就

せり。眞佛とは大經無邊光佛無碍光佛と言へり。又諸佛の中の王光明中の極尊なりと

眞土とは大經に無量光明土と言へり。或は諸智土と云へり。

今日く本佛は法爾本佛報身とは衆生に對する報なり。一々誓願衆生の爲なれば因果

的酬報感の如くなれども其實空間的に衆生に對する酬報常恒に衆生の信念に報酬す

衆生信する時は攝取し念する時は酬いて靈化す。

如來身土

絶對心靈なる如來の眞心土。如來本絶對心靈に在ませば、國土にして即身、身即心三にして一、三にして三、差別即平等、平等即差別、如來自身には本一體なれば若し心性なりと觀すれば全體精神態ならざる處なし。また身體即如來の清淨法身なれば一切處として摩訶毘盧遮那の靈態に非ざる處なし。寂光淨土は絶對なれば處として國土ならざるはなし。問、若し如來身土絶對にして處として靈性ならざるなしと云はば現に吾人各何故に之を感覺することを得ざるやと。答て如來は本來永恒不變の靈態に在ませども衆生は無明の爲に翳せられて自ら之を見ることが能はず。同じく宇宙なれども實體と現象と分ちて吾人の感覺する處は現象界にして如來は實體の即ち觀念界に在す。

實體は絶對無限にして規定を離れたり。現象界は相待有限にして相待に規定せらる。吾人が感覺は現象界に相應し實體は觀念に相應す。吾人の感覺は天然に規定せられ有

限にして器械的に感覺するのみ。故に絶對の實體は感覺するに由なし。器械的的感覺機能を得ずして直觀に絶對的觀念に住し心眼開發する時は意を開きて大虚を瞻るが如く無限の靈性を觀することを得べし。即ち直接に如來の靈光に感觸することを得るは感覺界に非ずして觀念界にあり。さればとて感覺界と觀念界と其體別なるに非ず。如來の靈體の中に在て衆生自ら感ずること能はざるのみ。心性として如來を觀せんか。如來は本絶對真心即ち一大心靈體にして宇宙に充滿す。心靈は一切に超絶して而も一切に即せざるなし。心性四句を離れ百非を絶し清淨本然不生不滅常住無壞徧空徧徧時間無盡の徳を具して永恒に實存す。

如來一大心靈を法界體性智と曰ひ大圓鏡智は絶對觀念態にして宇宙處として如來鏡智の中の寫象ならざるはなし如來は實體の内面より自性自觀的に觀すれば絶對平等理性ならざるなく衆生は感覺の差別の假相を見る。如來の自性より觀すれば物心一如生佛一體の性を觀す。妙觀察智は一大心靈の如來には無盡の徳を具して徧々衆生の心水澄む處に隨て啓示す。如來の智萬物を造作するに誤ることなく、種々無盡の造作を處として造作せざるなし。吾人は現象界の方面に於てのみ如來一大心靈の萬物造化の妙用を知るのみ、如來の内面的作智は萬物を化作す感覺に於ては吾人が無明を隔てて如來の靈體と象と用とを觀するに過ぎず。如來は嗚呼大なる哉如來の心と寫象と意志的の妙用あるについて宇宙を精神態と爲して觀じたるなり。次に身的に觀する時は之を清淨法身と爲す。宇宙全體即ち如來の靈體なり。清淨法身は即ち體なり。地水火風空識の六大の本體之を法身と名づく。其量無限にして無盡の徳を含藏す。六大無碍の靈體之を毘盧遮那と名づく。所謂大日如來心靈の覺體摩訶諸聖は心麁の眷屬依正二報本有の理體を法身と名づけ毘盧遮那に即ち體に具する所の大智慧即ち一切悲態を報身と名づく。即ち大圓鏡智等の五智は如來の圓滿報身の徳として莊嚴す。人間に有する智即ち寫象の本體なり。絶對法身の寫象即ち智慧態が圓滿に顯現したるを圓滿報身と名づく。また八萬の相好光明等を照すことこの一大靈相の顯現なり。

應身とは絶對意志の活動なり。如來法身は一切衆生に對して解脱せしめん靈化の爲の應化に外ならず。本如來意志は處として在らざるなきが故に衆生の念する所に隨て

應じて化をなす。三昧定中に映現するは内面に應化にして之が動機となりて善の行動を爲すは是全く個體に心靈の意志が應現したるに外ならず。若くは信心開發して觀する時は、宇宙萬物の中に如來の聖意顯現せざる處なし。有情非情草木國土悉皆成佛なれば其活動が即ち如來の隨類の應用に外ならず。自觀的に觀すれば宇宙は如來の法身にして同じく報應の三身なり。衆生は煩惱に障られて自ら見ることを能はざるなり。如來を三身として觀畢んぬ。

次に如來を世界態に觀する時は寂光土まだ一眞法界と名づく、宇宙實體如來の國土にあらざるなし。清淨本然法界に徧徧す。其本質非物非心にして物心の一元總て一眞法界と名づけ又常光土と名づく。現象は雜多の感覺世界を現するも如來は本來常寂靜にして光明照然寂とは世界の實體にして即ち一眞法界體性堅凝にして清淨本然徧一切處、處として如來の土ならざるなし。照とは智慧態にして報身は一切悲と名づくべき徳にして淨土には唯如如の理此の智となるのみ。虛徹靈明にして十方に照然。土とは一切の所依にして又物として之より生ぜざるなきが如く如來の意志絶對意志は即ち萬物の休止する處萬物の發現する處、土は即ち體にして用、體とは萬物の休止する處宇宙萬物悉く一大一眞法界に依止せざるものなく、また此の勢力によつて動せざるものなし。之を土と名づく。常寂光土は是如來の土なり土即ち如來にして如來即ち土なり人已に心開發すれば理想の中に常寂光土に住して内鑑冷然として如來の土に安立し如來靈土の中に動き報命終る時は寂光土に歸す。如來は本身心土即一にして而して心土と爲る故に是の絶對なるを無對と爲す。

眞佛土の異名——淨土とは感覺的

一切に超絶せる如來の眞境は不可思議にして相待的規定の思慮に超ゆるに彼の眞佛土は感覺界を超越せる諸の聖者の處にして絶對靈界なり。同一の眞佛土に名稱甚だ多し。感覺的に清淨國土と稱し、又美天國と云ひ、感情的に極樂又樂園と曰ひ、智力的に無量光明土又智土と云ひ、理智的に常寂光土と名け、故意的意志を超越せるが故

に無爲自然界又無爲涅槃界と云ひ、天然的感覺を超越して無明に秘せられたる凡夫の見聞を絶するが故に密嚴淨土と名け、心靈具徳(三字不)して重々無盡の具徳を表はして蓮華藏世界と名づく。是如來の清淨歡喜智慧不斷の一大靈光が四心四能に對する心象なり。感覺的には淨土と名づくるも天然的感覺に非ず如來の靈界は感覺は物質にあらずして靈界の感覺的心象にして三昧定中に清淨國土を觀するは是心象なり。心象至美の境に五妙境界相あり。是現宇宙を離れて遠き彼岸に在るに非ず客觀に淨穢あるに非ず、自己の心理の無明翳れ心眼開發する時は靈界處として靈界ならざるはなし。是三昧を修して心眼開發する人の已に證明する處なり。聖經に衆生は苦惱充滿する世界と見る中に如來は淨土にして常恒安穩にして至美莊嚴の淨土に安住す。また、淨名經にも佛陀は常に七寶莊嚴種々美德顯現の中に在るにも拘らず舍利弗等は己が業識によつて穢惡充滿の世界を見ると云へり。また舍利弗等の感覺する穢惡充滿の中に於て佛陀は衆寶莊嚴の淨土を觀す、即ち誠る淨穢は心象なりと云ふことを。

觀經に佛陀は自ら常淨土の中に在ると雖も凡夫は心眼盲て之を見ること能はざるべきを知り玉へば韋提希に告玉ふに、汝今知るや否や阿彌陀佛此を去ること遠からず。汝今念を繋けて彼國を觀すべし。イダイケト曰く若佛滅後の諸の衆生等は濁惡不善にして五苦に逼はる。云何んがして常に阿彌陀佛極樂世界を觀すべし。地觀の想を説て此想成する時は極て了々にして閉日開目に極樂を見る。若し三昧を得れば彼國地を見ること了々分明にして具さに説くべからず。又觀經に如來は是法界身一切衆生心想中に入る心に佛を想ふ時は心即是三十二相八十隨形好なり。又眞身觀に如來は圓好光明及び化佛具さに説くべからず。心眼をして具せしむべしと即ち知る淨土は心眼の所觀なり、心眼開く時は處として淨土ならざるなきを證せん。

淨土の莊嚴は大經に其佛國土は自然の七寶を合成して地とす。恢廓曠蕩として限極すべからず。悉く相雜廁し轉た相入間せり。光赫焜耀として微妙奇麗なり。清淨莊嚴十方一切世界に超絶せり。衆寶中の精なり。彼國には七寶の樹ありて金の綱がかゝり瑠璃の技には玉の花金の果あり互に相映飾して云べからず。七寶の池に臨めば八功の水澄て金沙の光徹して水なきが如し。水の中に化天童子遊び遊ぶ邊の樓閣七寶の光色

焜耀せり。金地に青赤の華を散し空中常に天籟を聞く等一切の萬物嚴淨光麗に形と色殊に勝れて妙を極め美を盡して能く稱量することなし。たとひ天眼を得とも見極むこと能はず。また其麗しさ淨かにしてあらゆる世界としてすべての物に映現することはたとへば明鏡に其面かけを寫し見るが如しとや。また地より上虚空に至るまでの金殿玉樓寶寶閣よりすべての萬物に於て皆無量の雜寶百千種の香を以て共に合成しその麗しさ美妙にして此の感覺界の物の比にあらず、馥郁たる妙なる香にて普く世界に薫する等斯の如きの至美の妙境は如來一大心靈の感覺心象にして粗劣なる物的現象に非ず。藕益禪師曰く寂光若し勝妙の五塵無くんば何ぞ夫れ偏眞に異ならん。パウレン曰く美天國の至美の莊嚴は靈界の心象なり現經驗界の萬物に於ても悉く吾人感覺の現象なり。こは麗麗なり感覺の現象にして彼は靈化の感覺現象なり。清淨國土とは靈界の感覺的心象なることを明す。

極樂とは感情的

清淨土とまた極樂とは同體の別名にして彼は感覺的に名づけ、此は感情によりて名づけたるに外ならず。彼靈界は生理規定を脱したる真理現象にしてすべての相待的また天然の生理規定の身心の苦憂あることなし。更に一大心靈即ち如來靈界は本無、自然の界にして自然の妙樂あり常住不變自然の靈福自在無碍の故に。

感情なるものは自己の情に適すれば歡び安ければ樂し然るに靈界は眞理に隨順し徳性に稱ふが故に安樂なり。

經に其土の相を説て其衆奇妙にして道場超絶し國泥洹の如くして等双なからむ。十方より來生せんもの心悅清淨にして已に我國に到らば快樂安穩ならしめん。また國中の人天受くる所の快樂滿盡比丘の如くなり。其佛の世界を名けて安樂と云ふ。

靈界は常樂我淨の四徳を以て莊嚴す。彼には天然相待生理規定の幸福主義肉慾の爲に飢餓の苦なく彼は眞理に稱ふが故に常住にして轉變なく天然規定に縛せられざるものは心靈常恒不變なり。故に心に變易なく老死無常の爲に惱まされず。常恒不變の心靈 大心靈と合するが故に心靈物と相應し心物に逆ふことなきが故不變なり。常住なり。純粹なり。心靈には如何なる物も其心を動かす能はず故に心靈は安穩なり常恒不

變なり。世間無常のさま朝に比翼のらぎり夕に別離の悲しみあり今日の樂、明日の苦悶となるあり歡樂究まつて愁傷多し。心を靈界に遊ぶ時は彼は無爲の都の春永く畢竟逍遙して有無を離れ大悲心に薰じて法界に遊び分身利物等しく殊なることなし。經に靈界歡喜の心象を説いて彼に黄金の池あり金の砂徹照し池の上に種々の樹あり花葉垂れ布きて香氣普く薰ず雜色の光り麗しうして水上に彌覆せり。諸の菩薩等が寶の池に入りて意に水をして足を淨めしめんと欲せば足を淨め身を濯がしめんと欲せば身にそそぐ。調和冷煖にして自然に意隨て神を開き體を悅ばしめ心垢を蕩除す。清明激潔にして淨きこと形なきが如し。寶砂映徹して深として照らさすと云ふことなし。微のなみ廻り流れて轉た相ひ灌注す安詳として徐く逝いて遅からず疾からず波は無常自然の妙聲を揚ぐ。其の所應に隨ひて聞かざるものなし。或は佛の聲を聞き或は法の聲乃至諸の妙なる法の聲を發し其の所聞に稱て歡喜無量なり。清淨にしてまた幸福欲を離れ眞理に隨順ひすべての苦難の名だにあるなし自然快樂の音のみ故に安樂と名づく。又彼の聖者等は眞理に稱へる清らけき身もろもの音聲神通すべての功德を具足し、居る處の宮殿衣服飲食等の莊嚴の其自然にして、若し食せんぞ欲せば七寶の盃器自然に前にあり金銀寶石等の盃器が意に隨て至り百味の飲食自然に盈滿す、是の如きの食は色を見香を嗅ぎ意に食せりと思へば自ら飽くに至る。實に身は心と共に靈にして味に着せず事已れば化して去りぬ時至らば亦現す。彼は清淨にまた安穩にして微妙なる快樂に靈福に充たされたり。靈界は無爲湛沍なればなり。彼に諸の聖者等は智慧高明に神通洞かに達し咸同じく一類にして形異狀なく唯經驗世界に準じて天また人と名づくべく其實は相好色身靈態にして世に超て希有なり。容色微妙にして天にあらず人に非ず皆自然靈神無極の體なりと。

晨に散りしく花をひろいて遙かに他方十萬億の佛にたむけ還た無量百千三昧をうる營ばかり又神通に乗じて虚空會に登れば寶殿身にしたがひて空に中に飛ぶ。雪路の徘徊風情きはまりがたし。花雲たなびきてかけはしとなれば聖衆袖を列らねてわたり香風吹きて樂をなせば飛天袂を翻して舞ふ。面々に通を飛して遊戯快樂するありさまとりどりにあやしく妙なり。

相待的生滅變易を超えて靈界に入る時は常住不變にして萬物に靈應して心靈には逆ふものあるなきが故に自然に歡喜あり法身自受用の法樂は宇宙に充ちて唯靈福のみ、故に淨國は唯靈福と光榮のみ。無碍解脱にして心靈眞我にして法界として自己ならざるはなし。法界の重々無盡の靈福に常樂我淨四徳圓滿宇宙は此の四徳を以て充滿せり。斯の妙味を感せんぞ欲せば自己を捨て主我幸福主義を避けて心靈を開きて如來の一大心靈界に遊ぶべし。ここに遊ばんと欲せば佛陀の三昧に入りて己を捨て如來を念すべし。凝神一にして竟に靈界に入ることを得べし。如來に投合したる心には常に靈福にして歡喜と安穩と光榮のみ。自己をすてて眞我に入るが故に天然規定を脱して心靈は無碍自在なり。心は清く深く玲瓏照白にして云ふ可からず。こは心の窓を開きて絶對の心靈の靈福即ち常樂我常の靈性が自己の心窓より窺はれたるに過ぎず。大心靈の即ち如來の靈性歡喜態が個人の心象に現する時は歡喜光の感情的心象の下に説明するが如し。歡喜的心象全體とする時は即ち極樂世界と名づく。

理智に約して常寂光土また智土と名づく

先に靈界を感情に約して安樂世界と名づけて靈性を説明せり。同じく靈界を理性と智とに表明せば寂光土と名づく。

常寂とは如來一大靈界は絶對無限にして不自常寂にして不生不滅永恒自存の心靈態にして虚徹靈明其體性は純粹至精の理性にして實は時間を超空間を超え本自常然是萬物の本體にして又宇宙の實體なり。甚深の理ここに至つて盡き萬物の源ここに至つて究まる。絶對理性及一切智慧とのみあつて昭然たり。之を寂光土と名づく。

全宇宙は自體より觀すれば絶對靈性なれば如來は常に寂光土に居ます。心靈開發して宇宙全體として眞理の靈性大智慧の光明あるのみ。個人の靈性と智慧とは此の分身のみ。絶對理智三際當念に十方圓融、非空、非有、非自、非他、無去、無來、不生、不滅。

吾人心靈に一切の感覺及び感情を抽捨し純粹靈性に智性のみを以て佗の一切の心象を去る時は本自寂光となり、空間に徧し時間に徧し、虚徹靈明、不生不滅、唯靈性あり

るのみこれ常寂光土を窓より窺ひたるなり。如是にして絶対なるは是理智の靈界なり。如來の靈界を無量光明土と名づくるまた諸智土と曰ひ又無邊光、諸佛の中の王也。光明中の極尊なり。盡十方無碍光等は是如來佛土を智慧態に表明したるものなり。

意志的に涅槃界と曰ふ

靈界は一大心靈にして又一切萬物の靈性の源にして又歸趣する所。靈界を意志的に無爲涅槃界と名づくる所以は天然の生理規定の一切の意志は各々自己の目的に隨て活動す。夫れ自己の目的は真理に非ず顛倒の生理に順するが故に、自己の目的を捨て一大目的即ち如來の靈性に協ふ時は終局目的に一大心靈性に歸趣することを得。是個人を捨て絶対の靈性即ち如來に歸入せし時即ち涅槃界に入り。涅槃は一大心靈なれば本來不生不滅天然意志の轉變定まりなきに同じからず。靈性と致一し靈化する時は無始不生不滅の靈と致一す。靈界は作意識意思を超えて自然無爲なり。而して之を消極的には絶対靈性は不生不滅非空間非時間一切の動作を超越して無爲涅槃界、言語同斷、心行處滅、名づくべからず強て名けて無爲涅槃界の名づく。

靈性は一切をして休息を興へんが爲めに一方には寂靜涅槃無爲の都土を實體の中に構へたりしも一方には永恒不斷に絶対心靈が一切の世界萬物に活動の力を興へて生活せしめ又一切をして終局目的に攝取する處の勢力また此の靈能の力に外ならず。故に涅槃を無住涅槃と名づく。涅槃の體は個人に非ず絶対なり。絶対靈性が一切の個人を顯現して活動をなすその靈性は宇宙に周備す。

如來の靈性涅槃は内面には寂靜無爲の(二字不明)地を以て充しめ一方には任運無爲に活動す。十方一切聖賢等の靈的活動は其本一大靈能の力の個人に現れたるに外ならず。彼は夫鼓の鳴らさずして自ら鼓するが如く無爲任運に動くなり。天然の現象には自然界一切の運動天體無數の星辰より地球萬物の活動は(二字不明)に如來一大靈能を離れたるものに非ざるも、いまは一切を終局目的に導くものの方をいふ。

如來無住涅槃とは是なり。極樂即ち一大靈界は單に消極の歸趣なる無爲の樂都たるのみにあらず、一切の心靈的活動も悉く如來の一大靈能の力による故に、楞伽に十方一切の法報應身及變化身等は無量壽極樂國より生ずと。極樂一大靈性は一切の歸趣の

理性にしてまた一切活動の原動力なり。されば己に如來に攝せらるる上は精神生活に於て内面には常に如來の無爲涅槃の靈界に逍遙し一方には如來の聖意を現せんが爲に活動せざる可からず。これ無住涅槃の形式なり。

神秘的に密嚴世界と名づく

一大靈界本來宇宙は是毘盧遮那如來蓮華藏世界に住するのみ。然るを衆生無始已來無明に秘せられて自ら之を識る事能はず。心眼開發する時は宇宙として如來身ならざるはなし。全體を以て毘盧遮那及び密嚴淨土たるのみに非ず一切の個々は悉く一大靈性の顯現なれば事實より云はば人々悉く大日の全身處として密嚴淨土ならざるはなし個々物々各自の識不識に拘らず本自法然に大日如來五智の四佛及び十六菩薩三十七尊一千七百萬乃至微塵の眷屬を攝して安住す。故に十方無盡の如來を觀せんと欲せば自己の心運を開きて一切の如來の己に安置せるを觀すべし。密嚴世界を觀せんと欲せば自己の無明の翳を除くべし。密嚴淨土法爾として顯然、内面は己に眞言の下に於て明しぬ。何故に極樂即ち靈界を密嚴世界と號するや。答て、衆生本其淨土に居ながら之を知見すること能はざるに諸佛は常に密嚴世界に居す。同じ中に在て衆生は猶自ら穢惡の麁劣の世界を知る。

金剛頂經に金剛界遍照如來五智所成四種法身をもて本有金剛界金剛心殿の中に於て性所成の眷屬乃至微細法身秘密心地の十地を超過せる身語心の金剛等と與なりきと。諸の菩薩能く見ることなく但に覺知せず。

今日く吾人の心靈もと絶対心靈、即ち本同一の靈性、如來の個體顯現なれば、自己の心靈開發する時は觀念界無限にして其體法界體性即ち宇宙と一體なり。己心の伏藏を開く時は四智及三種法身乃至微塵の佛刹も自觀に寫象すると一切佛刹悉く心窓の開く時に顯現す。自己心靈即ち一大心靈の個體なれば自己に一切を攝する如く一切の個々法爾として其徳を具す。衆生無明に翳せられ自ら知らず故に密嚴世界と曰ふ。

法華には我三界の如くに三界を見すと。觀經には佛の曰く韋提希よ汝は是凡夫心想羸劣にして如來の境界を見ること能はず。然れども阿彌陀佛此を去ること遠からず但し自己の心眼の一翳を隔つるのみ。心眼の膜を除く時は宇宙本極樂世界なるを觀せ

ん。天然の感覺に對して密嚴世界と名く。

譬喩的に蓮華藏世界と名づく、

宇宙靈相は靈界を譬喩的に蓮華藏世界と名づく。華藏世界と云ふも外ならず宇宙の實體即華藏界なり。天然の人は無明に翳せられて之を知らず宇宙の萬有は一大心靈の分身の個々なれば、同一理性の差別的顯現なれば一切の個々は相互に關聯して孤立なるものあらざれば一を舉ぐれば一切を攝す。一個の塵に一切世界の塵々を收む。一人に一切を容る。人の腦裏に十方無量の世界を容るるも相得げず。一塵に然かる如く一切の塵々亦然り。重々無盡にして法爾として理爾なり。

故に達人は一塵の中に於て無量の世界を觀る。宇宙全體蓮華藏世界にして十佛の自境界なれば一切の塵々も亦蓮華藏世界にして十佛果海中に在て法輪を轉す。甚深不可思議宇宙無限の故に一塵も無限なり。法界に無盡の徳を有する故に一塵また無盡の徳を具す。法界に有らゆる物をして一塵に容ざるなし。一塵を捨つる時は法界の事境界あることなし。一塵如來の靈界なれば一切の塵々悉く華藏世界ならざるなし。塵中に於て眞佛土を觀すること能はざるものには宇宙を盡すとも眞佛土を發見すること能はず。前に己に華嚴家の中に於て略して説きぬ。

如來眞佛土甚深々々微妙凡夫の管見を以て測るべからず。古徳或は立宗判教の上に於て四土を立て安養は同居土としまた寂光と極樂とは階級的に分つあり。そは感覺感情をおとして理性と智とを尊むが爲なり。また古徳各立宗判教の便宜の説にして事實然るといふに非ず。

古徳凡聖同居土等の四土を立て安養と寂光とは階級的に格別なるやうに説き判たるは隨宜の方便のみ。其實同じく如來の靈界宇宙の真相にして心靈開發したる人の歸する所なり又安住する處なり。感覺的に淨土また美天國と稱し、感情的に極樂また安養と呼び、また睿智世界最高徳と最靈福と一致する所また寂光土と云ひ、密嚴世界と蓮華藏世界と云ふ。

靈界は心象にして至美玲瓏照曜として十方を照し微妙至妙至美の感覺的心象なり。之を淨土と名く。

靈界は眞に稱ひ毫も違情することなく自然の靈福常住不變碍自在清淨の故に唯靈福と光榮とあるのみ。感情的に之を極樂界と名づく。

至眞眞理の靈界常自寂靜にして虛徹靈明至理に眞智の光明あるのみなれば寂光土と稱す。又睿智世界と名づく。是智力的に名づく。

彼は一切の行動の終局の歸趣する所至善の究竟する處、美の行爲はここに至て圓滿に達し一切の善の行爲は是より發動するが故に、無爲涅槃界と名づく。無住涅槃なり是れ意志的に名づく。

如來法身自證の境界は萬性具備の莊嚴、無明に秘せられて感覺界に知見すること能はざれば密嚴世界と名づく。

心靈開發するものの住する處重々無盡具徳の理を盡したるを譬喩的に蓮華藏世界と名づく。

其他種々の名詞あるも同じく一大靈界の即ち眞佛土の別名にして其體別なるに非ず此如來無對光の身土を種々の方面より觀察して其徳性を詮表せんが爲に名づけたるに外ならず。

如來は無對にして一切の相待の規定を超越する絶對無規定にして而も一切の相待規定の萬物の歸趣する所方處を以て論ずれば遠き彼岸を指すに非ず絶對の靈界眞佛身土衆生の無明盡くる處何處に於ても實現すべし。

三世一切の聖賢ここに到達して初めて正覺を成す。故にこれ一切の歸趣する處十方世界の諸佛ここに到れば唯一にして不二、然れども衆生を度せんが爲にまた十方一切世界に應化の身を現して八相化相を示す。

天然界に現して感覺的現象の中に化儀を示すを應身と名づけ觀念界即心靈界の教王として衆生の觀念内面に於て常住無碍に不可思議の身を以て衆生を度すを法佛と名く一切の至善の行爲の終局に觀見するを報身佛と名づく。一切斯れ如來の無對にて最終の歸趣として同時に一切法報應及び變化の聖賢の發現する處なるが故に楞伽に十方一切法報應化身等は皆無量壽極樂界中より出すと。

如來の讚頌

法藏菩薩發願の偈

三六

願はくば我れ作佛せば
生死の海を渡りては
有ゆる善と波羅蜜の
一切の恐懼の物のため
假令無量のほとけあり
斯も數多のみほとけに
一切と共にわたるべき
何なる苦難を凌ぎても
たとへば數え盡されぬ
光明遍なく照らしては
斯くは志勇精進し
我作佛せる國ばかり
無量の寶奇妙にて
無爲泥洹の國きよく
我世の一切の衆生が
恕ひやられて哀愍なる
十方より來生する人の
我國にだに到りなば
幸はくは我がみ佛よ
衆生救度べき願望を
十方世尊無礙の智よ
假令此身をもろくの

聖法王に齊しくし
遍なく度脱し盡さんん
願行あまねく成就して
大ひに安きを施こさん
其數恒沙に過ぎにける
心つくせる供養より
道をもとめて堅正に
却をかざるに如ぬなり
有ゆる諸佛の國々に
洵らぬ隅もなきまでに
威神はかり難かるに
最勝第一ならしめん
道場ことに超絶し
また等雙ぶる處なけん
生死の海にしづむ身を
乍でか度はて有ぬべき
心は清よに安らけく
快樂安穩ならしめん
我真證を證明しませ
果さし欲とて力精まなん
我心行を知ろしめせ
猛き炎の中に入り

三七

有ゆる苦毒を受るとも
いよく勇猛精進し

四誓の偈

三八

衆生に代らん我行は
忍びて終に悔ぬなり

我は超世の願を建つ
斯願若しも満さずば
我は無量劫のなか
一切の貧苦を濟はずば
我れ佛道を得るときは
若も聞へぬ處あらば
離欲と正念淨慧との
無上の道をもとめては
神力大光を演べまして
三垢の冥を消除ては
彼の智慧の眼を開きては
諸ての惡道閉しては
功祚成満いたしては
日月の光りも戕まりて
衆てに法藏開きては
常に大衆の中にして
一切の佛に供養ては
願慧まどかに成滿し
佛の無礙の智の如く
願くは我功慧の力
斯願若しも尅果せば
虚空に充てる天人よ

必らず無上道を得ん
誓ひて正覺と成らぬなり
大なる施主の身とは爲り
誓ひて正覺と成らぬなり
名聲あまねく洵らなん
誓ひて正覺と成らぬなり
一切梵行修めつゝ
諸の天人師と爲らん
普ねく無際の上を照し
衆の厄難を濟はなん
此昏盲の闇を消し
善趣の門に通達なん
威を十方に耀やかし
天の光も隠れなん
功德の寶を施こさん
法を説きて師子吼せん
衆の徳本具足なれ
我れ三界の雄とならん
通して照さぬ處もなく
最勝尊にひとしくし
大千應さに感動し
妙なる花を雨せがし

三九

靈鷲の月

四〇

滅後に我を戀したひ
衆生既に信伏し
一心佛を見まほしく
時に我は衆僧らと
即ち斯は語るなり
唯方便の力にて
餘國に在りて人々が
我また彼らの中にして
汝ら此を聞ずして
我は衆ての衆生が
爲に此身を現はさで
一心に戀ひて慕ふれば
渴仰の心生じなん
質直に意柔軟けく
白から身命おしまねば
俱に靈鷲の山に出で
常に滅せず此に在り
滅と不滅と現すなれ
恭敬信樂する者は
無上の法を説ぬべし
但我滅度すとおもふ
苦海に没在せる故に
渴仰心を生せしむ
乃はも出て法を説く

靈山淨士

我か神通の力にて
常に靈鷲の山及よび
衆生の劫は盡果て、
我此の十は安穩げく
園林および堂閣は
金の樹は花果多く
諸天は天の鼓うち
曼陀羅の花を雨ふらし
今より無央數劫に
所餘の諸の住處にも
大火に焼ると見る時も
天人常に充滿し
種々の寶に莊嚴し
衆生の遊樂する處
衆の伎樂を作しては
佛と大衆に散すなり

釋尊の本懷

四一

如來無盡の大悲より
釋迦牟尼佛と現はれて

世の群萌を拯はんと

正しく出世本懷の

世尊大事の因縁は

分子れし本具佛性を

形氣に受たる煩惱を

智徳を併べ備へては

衆生無始く無明は

彌陀常照に照す日の

即ち菩薩の階位にて

淨滿月は正覺の

闇に迷ふは凡夫にて

圓かに照して滿ぬるは

三界の子を衿れみて

光く道教か闡きまし

餘の方便を擱ききて

彌陀の法を演たまふ

衆生本有の法身より

開きて清きに悟らしめ

靈化し菩薩の徳とはし

眞の佛子と爲むか爲め

恰かも闇き月の如と

映する影の缺盈は

新月進みて十五なる

佛位に登りし姿なり

菩薩は分に光を得

即ち佛陀の覺なり

聖意の現はれ

聖なる聖名を稱へては
如來の無上恩寵を
如來の神聖なる聖意
如來の正義なる聖意
至真にしていと聖き
至善にしていと聖き
至美にしていと聖き
我をすべての同胞と
聖意の現はれ仰ぐなり
我らか感情に滿たしめよ
我らか良心を照しませ
我らか意志に現はれよ
靈國をこゝに格れかし
靈國をこゝに格れかし
靈國をこゝに格れかし
安き靈計に在らしめよ

佛々相念の讚

四三

本有常住法身の

威神の光明永しへに

無明に迷ふ子らか爲

釋迦牟尼佛と現れて

譬へは西に日は入も

無量壽王の日光は

釋尊出世の本懷を

即ち世尊は寂靜に

本佛彌陀の靈光は

爾時諸根悅豫し

光き顔は巍々として

影か表裏に暢る如と

無量光王大日輪

十方世界を照しては

方便不思議の力より

如來の慈悲を示します

光は月に映る如と

牟尼滿月に輝やけり

靈鷲の嘉會に示さんと

彌陀三昧に入たまふ

人佛牟尼に映るひて

姿色も殊に清らげし

譬へは明淨なる鏡

威容の光極みなし

同 二

如來清淨光明は

諸根は最も清らげく

如來歡喜の光明は

諸佛の常に住ませる

如來智慧の光明は

世間の闇を照しては

如來不斷の光明は

至高徳に在まして

如來萬徳具備りて

三輪完全の鑑とし

人佛牟尼は一向に

世尊の感覺に映るへば

奇特なること極みなし

世雄の聖情に融合し

大我の中に安住す

世眼の智慧と現はれて

如實に衆生を導びきぬ

世英の聖意に實現し

最勝道に住しける

天尊の身に現じては

衆生に軌を垂れ給ふ

本佛彌陀を憶念し

四四

本佛彌陀の靈徳は

入我我入は神秘にて

甚深不思議の感應は

願はくは我同胞と

念佛三昧を宗として

牟尼の身意に顯現す

三密正に冥合し

是れ斯教の秘奥なり

世尊の範に隨順し

光の中に生活さなん

佛智の靈國

釋尊自から見給へる

便ち阿難に教へては

時に彌陀無上尊

光明遍ねく十方の

大小諸山一切の

譬へは劫水彌滿して

一切菩薩聖賢の

彌陀光王の光明は

彼の清淨の國土なる

自然微妙の莊嚴は

彌陀正覺の大音は

光明名號の靈力は

六道種々の垢穢なるは

淨土微妙の莊嚴は

佛の淨土の中ながら

衆生の認むる穢土の中

彼土に胎化の二生あり

罪福因果を信するも

若し人佛智を信解して

佛智の境を明さんと

阿彌陀世尊を禮せしむ

萬徳圓滿し玉ひて

諸佛の世界を照します

物皆な同し色となり

況濼汗汗たる如し

光はすへて隱蔽し

超然として顯かりき

地より乃至虚空まで

佛智不思議の所現なり

十方世界に響流せり

衆生を攝化し給へり

衆生業識の所感にて

佛智の所現と説玉ふ

衆生は娑婆と感ずなれ

佛は淨土を觀給へり

佛智を了解せぬ人は

彼宮殿に胎生す

聖意に隨順する時は

四六

四三

四七

相念の譜 四分四

5	1 - 1 1 1 - 6 6 - 2 2 2 2 0
ホ	シン ウ シ ヤウヂウ ホツ シ シノ
ぬ	じんのかう めう まこし へに
3	3 5 5 5 3 5 - 3 3 2 1 1 -
△	リヤウカ ウウ ダイニチリ シ
じ	つぼうせ かい てらして は

聖意の現はれの譜

2	2	2	3 3 2 5 - 2 0							
セ	イ	ナル	また	ナ	タ	キ	タ	ヘ	ミ	ナ
に	よ	ら	い	の	ま	た	な	き	み	め
2	2	2	2	2	2	1	1	2 2 7 6 6		
ミ	メ	ノ	アラ	ハレ	ア	フ	ク	ナ	リ	メ
わ	れ	ら	が	こ	ろ	に	み	た	し	よ

大正十二年六月二十日印刷同二十七日發行
 誌代年六冊登四貳拾錢 年十二冊貳圓
 編輯兼發行人 山崎 辨 成
 印刷人 東京橋區本八丁堀一丁目十五番地 熊太 郎
 發行所 東京小石川區水道端二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社
 振替東京四九三四八番